

4 製塩土器について

はじめに

任海宮田遺跡は海岸から離れた扇状地上に立地する遺跡であるにも関わらず、製塩土器が棒状尖底のものも含め破片数で227点出土している。このように海岸から離れた内陸部の集落遺跡で製塩土器が出土したのは、1979年の北陸自動車道の建設に伴う発掘調査で、立山町辻坂の上遺跡・上市町東江上遺跡から棒状尖底の能登型製塩土器が少量出土したのが県下で初例となる。その後出土例は増加し、岸本雅敏氏は県下の製塩土器出土遺跡を集成し、海浜部からの距離と立地条件からA～Dの4群に分類した。そして内陸型のB・C群について、出土量が少量であることから製塩土器が運搬容器として利用され、内陸型の遺跡を塩の供給・消費地であったと考えた。恐らく任海宮田遺跡の製塩土器も破片数は多いが、胎土に含まれる砂粒が概して粗く海綿骨針を含み、他の土師器と胎土が異なるものが多いことから、運搬容器として外部から持込まれたものと考えられる。また、この様な胎土を含め、器形および調整の特徴から土師器とは別に製塩土器として破片の数量を集計した。集計の結果、特に建物群1が検出されたB1地区と、建物群3が検出されたB6地区に集中することが分かった。その他の地区でも少量検出されており、ここでは製塩土器の分布状況を検討し、内陸型遺跡での製塩土器のあり方について若干の考察を行ないたい。

a 製塩土器の分類

出土した製塩土器は体部細片が大半であるが、一部器形の推定できるものが出土しており、第1図に図示した。器形の分類についてはヤトン谷内遺跡出土製塩土器の下村分類を参考に3器形が確認できる。以下に箇条書きする。

製塩土器A類：短脚尖底のもので、底部径が狭く、体部との立上がりに段をもつもので、下村分類の棒状尖底C2a類に相当する。2642を典型例とし、A類と考えられる底部破片が少量出土している。胎土は細砂粒が混じり海綿骨針を少量含むものと、粗い赤色砂粒が多く混じり海綿骨針を多量に含むものがある。

製塩土器B類：細くしまった頸部をもつもので、下村分類の棒状尖底E1b類に相当する。1263・1264の2点が認められる。胎土は粗い砂粒が多く混じり海綿骨針を少量含む。

製塩土器C類：丸平底の甕型土器である。内面に横および斜位のハケメ、外面に縦位のハケメを施し、器壁が薄く平滑に調整されている。B地区で出土した土師器の甕と胎土、器形、調整が異なり、ヤトン谷内遺跡の下村分類7群のものと類似することから、製塩土器と判断した。188・2655の2点が認められる。胎土は粗い砂粒が混じり、海綿骨針は含まれない。

また底部が出土しておらず断定できないが、粘土紐痕を残し、斜め上方に真っ直ぐ立ち上がる体部をもつ2646が出土しており、平底タイプの製塩土器と考えられる破片も出土している。

製塩土器A類は、底部径が狭く短脚の付くもので四柳編年のV期（9世紀）に相当するものと考えられる。従来富山県では8世紀第1四半期のうちに棒状尖底の製塩土器から平底の製塩土器に転換したと推測されていた。当地区の建物群が8世紀後半から10世紀前半を中心とする建物群であることから、上記の見解とは矛盾するものとなる。しかし能登地域での昨今の製塩土器の研究から短脚尖底土器が9世紀後半まで出土し、当地区的器形と類似性があることから建物群と同様9世紀のものと考えられる。

b 塩土器の分布

建物群が検出されているB1・B2・B6・B12・B13地区について、製塩土器の出土点数を破片数で数えた。その結果、全体で227点を確認した。内訳はB1地区で72点、B2地区で0点、B6地区で146点、B12地区で6点、B13地区で3点となった。以下地区毎に詳細を述べる。

B1地区：建物群1が検出されたB1地区では72点が出土しており、分類可能なものは製塩土器B類の2点（1263・1264）がある。脚部の形状は不明であるが、棒状尖底の底部と考えられるものが図示していないものも含めて3点（209）あり、C類と考えられる体部下半も1点（188）出土している。他は体部破片である。分布状況（第3図）は建物群1の中心域と考えられる調査区中央に集中する。主な遺構ではSB202とSB204の柱穴であるSP202・204やSI01などから出土しており、包含層からは39点が出土している。その他、羽口や土錘など手工業生産に関わる遺物が出土しており、特に土錘については、他の建物群に比べ303点と多量の樽型土錘が製塩土器と同様、調査区中央から集中して出土している。

B2地区：建物群2が検出されたB2地区では製塩土器が出土しておらず、羽口・土錘などの手工業生産に関わる遺物も殆ど出土していない。

B6地区：建物群3が検出されたB6地区では146点が出土しており、分類可能なものは製塩土器A類が2点（2642・2645）で、脚部の形状は不明であるが、棒状尖底の底部と考えられるものが他に3点（2643・2644・2956）出土している。他は体部および口縁部破片である。分布状況は建物群3の中心域および土師器焼成遺構の周辺と考えられるX260付近に多く分布する。主な遺構ではⅡ・Ⅲ・Ⅳ期の竪穴住居やSX219・SD122から出土し、包含層からは69点が出土している。建物群3の領域からは製塩土器のほか、土錘38点、羽口63点や鉄滓が竪穴住居から出土しており、土師器焼成遺構と併せ手工業生産に従事した可能性のある集団が利用したものと考えられる。

B12地区：建物群4が検出されたB12地区では体部破片が6点出土している。分布状況は建物群4と離れた調査区中央および南側の包含層や、中世の遺構から散在的に出土しており、建物群との関連性は薄く、流れ込みと考えられる。

B13地区：建物群5が検出されたB13地区では体部破片が3点出土している。分布状況は建物群5の竪穴住居が集中する調査区南東部分から離れた位置の包含層から少數出土しており、建物群との関連性は薄く、流れ込みと考えられる。

表1および第2図の円グラフは上記の結果をまとめたものであり、全体遺物量と製塩土器の各地区間の差を比較したものである。傾向としては、大筋で両者は同様の結果を示し、遺物量の差がそのまま製塩土器の差に反映しているようであるが、その格差は製塩土器の方が更に著しいものとなる。B6地区は特に出土量が多いことが分かる。1000m²あたりの出土量で比較しても同様にB1・B6地区的出土量が他地区を圧倒する。

以上のことから、B地区の製塩土器は建物群1・3のように体部破片が主であるが、建物群の分布と重なるように集中して出土し、恐らくその建物群に帰属する集団によって利用されたと考えられる分布傾向を示すものと、一方建物群4・5の様に分布状況から極少量の製塩土器が持込まれたか、あるいは近隣の建物群で利用された製塩土器の破片が流れ込んだものと考えられる分布傾向を示すものとに2分できる。

c まとめ

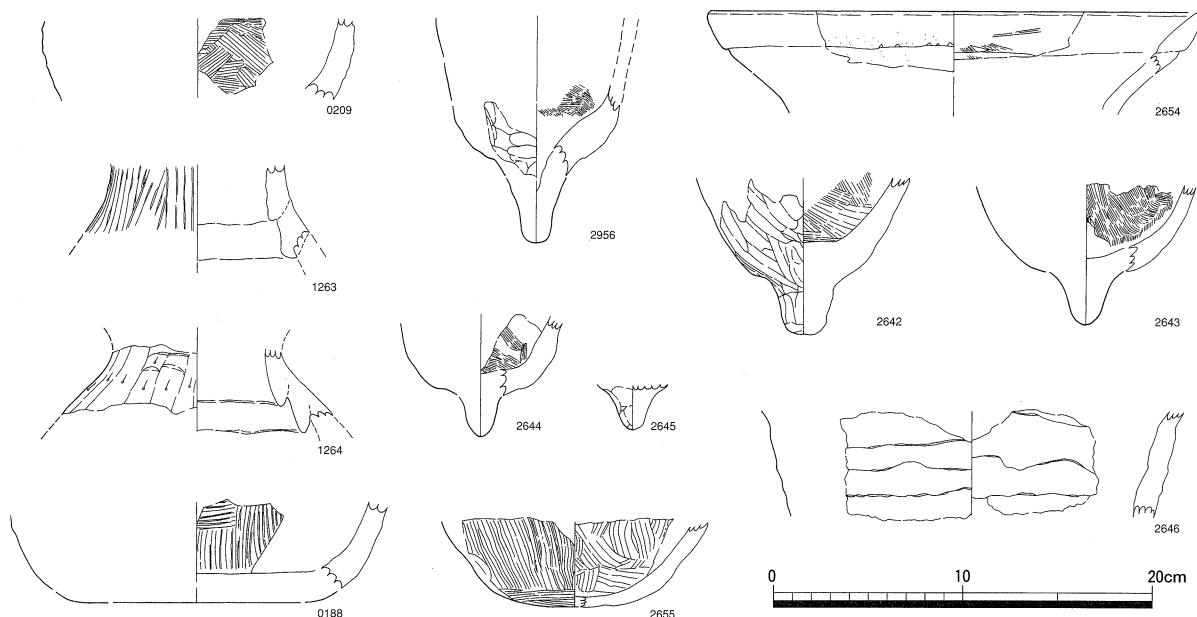
以上B地区で出土したII～IV期（9世紀前半～10世紀初頭）の製塩土器について、分布状況を概観した。特徴としては耕地の開墾を目的とする集落内でも、中心的な建物群である建物群1・3に塩を入れる容器として搬入されたことが分かった。それらの建物群は集団漁撈行為や土師器生産、鍛冶関連など手工業生産に関わっていた可能性が高く、運ばれた塩も塩蔵などそれらの行為に関わった可能性がある。しかし製塩土器は体部破片数に比べ、底部破片が少なく10個体程度の数量の可能性もあることから、製塩土器によって運ばれた塩だけで賄いきれるものではない。塩蔵等の手工業生産に利用する塩なら、製塩土器によって運ばれたものだけでなく、別の容器でも運ばれてきたものと考えられる。あるいは運搬には適さない棒状尖底土器を敢えて運搬容器として内陸まで運搬されたことについては祭祀など別の用途に利用された特別な塩であった可能性もある。

近年の発掘調査例の増加から、岸本氏の指摘した内陸型の集落遺跡は、富山平野内でも増加（表2）している。管見に認められるこれらの内陸型遺跡から出土する製塩土器は、1～4点程度の製塩土器が図示されている。この様な傾向は一見建物群4・5の出土傾向と符合するようであるが、建物群1・3群から出土した製塩土器のうち、器形の分かるものが1地区あたり5～6点しか図示出来ていない状況であることから、体部破片数を含めれば他の内陸型遺跡でも同程度の出土点数となる可能性があり、建物群1・3群の状況が一般的であった可能性も十分にあり得る。最後に、今回のような内陸型の集落遺跡で出土する製塩土器については、実測可能なものだけでなく、体部破片等の分布状況も把握する必要性があると実感した。またそれらの状況と各遺跡がもつ性格とを詳細に比較し、資料を蓄積することによって消費地における製塩土器の利用形態に迫ることが可能ではないかと考えられる。

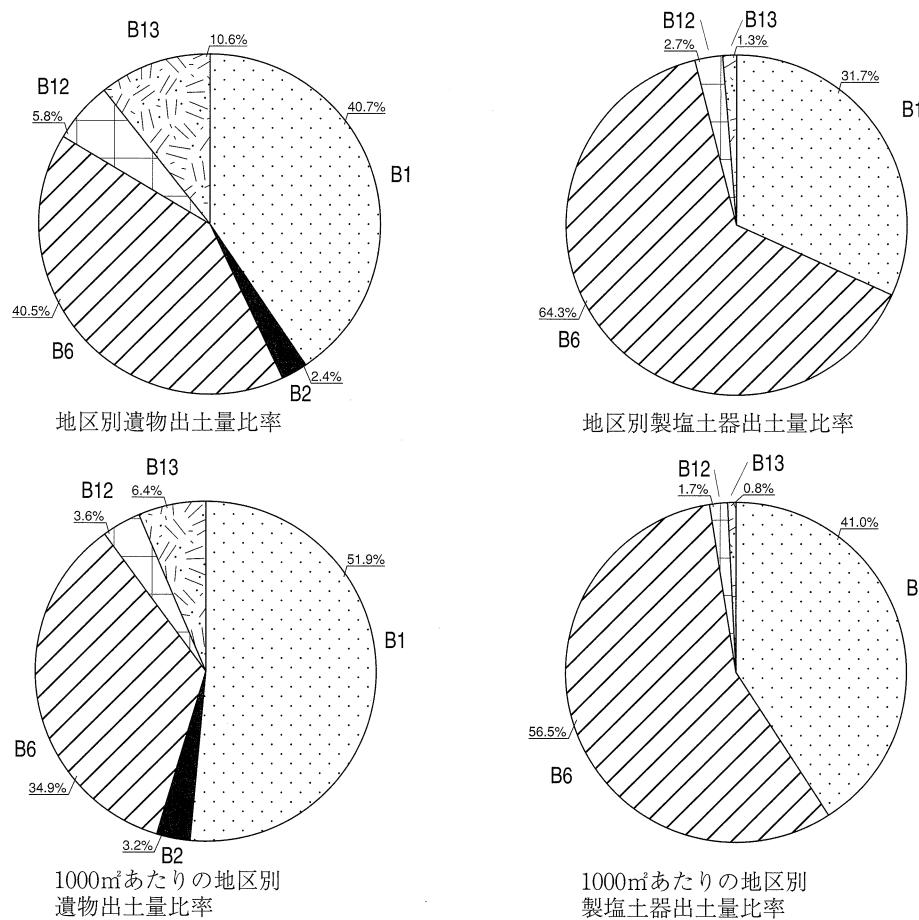
（武田 健次郎）

<引用・参考文献>

- 岸本雅敏 「富山県における製塩土器の成立と展開」『北陸の考古学』石川考古学研究会会誌第26号 1983
立山町教育委員会 『利田横枕遺跡発掘調査報告』 2001
富山県教育委員会 『北陸自動車道遺跡調査報告－立山町土器・石器編一』 1982
富山県教育委員会 『北陸自動車道遺跡調査報告－上市町土器・石器編一』 1982
富山県文化振興財団 『中名I・V遺跡発掘調査報告』 2003
富山県文化振興財団 『清水島II遺跡・中名II遺跡・持田I遺跡発掘調査報告』 2002
富山県埋蔵文化財センター 『富山県埋蔵文化財センターレポート』 2001
富山県埋蔵文化財センター 『富山県埋蔵文化財センターレポート』 2003
富山県埋蔵文化財センター 『栗山楮原遺跡』 1990
富山県埋蔵文化財センター 『富山市任海砂田遺跡発掘調査概要』 1990
富山市教育委員会 『富山市上新保遺跡試掘調査報告』 1996
富山市教育委員会 『富山市米田大覚遺跡発掘調査報告書』 2006
中島町教育委員会 『ヤトン谷内遺跡－能登における古代製塩遺跡の調査』 1995
婦中町教育委員会 『砂子田I遺跡発掘調査報告』 2004
舟橋村教育委員会 『利田横枕遺跡発掘調査報告』 2001
舟橋村教育委員会 『富山県舟橋村古海老江遺跡発掘調査報告－宅地造成に伴う調査報告書』 2002
舟橋村教育委員会 『浦田遺跡発掘調査報告(3)』 2000



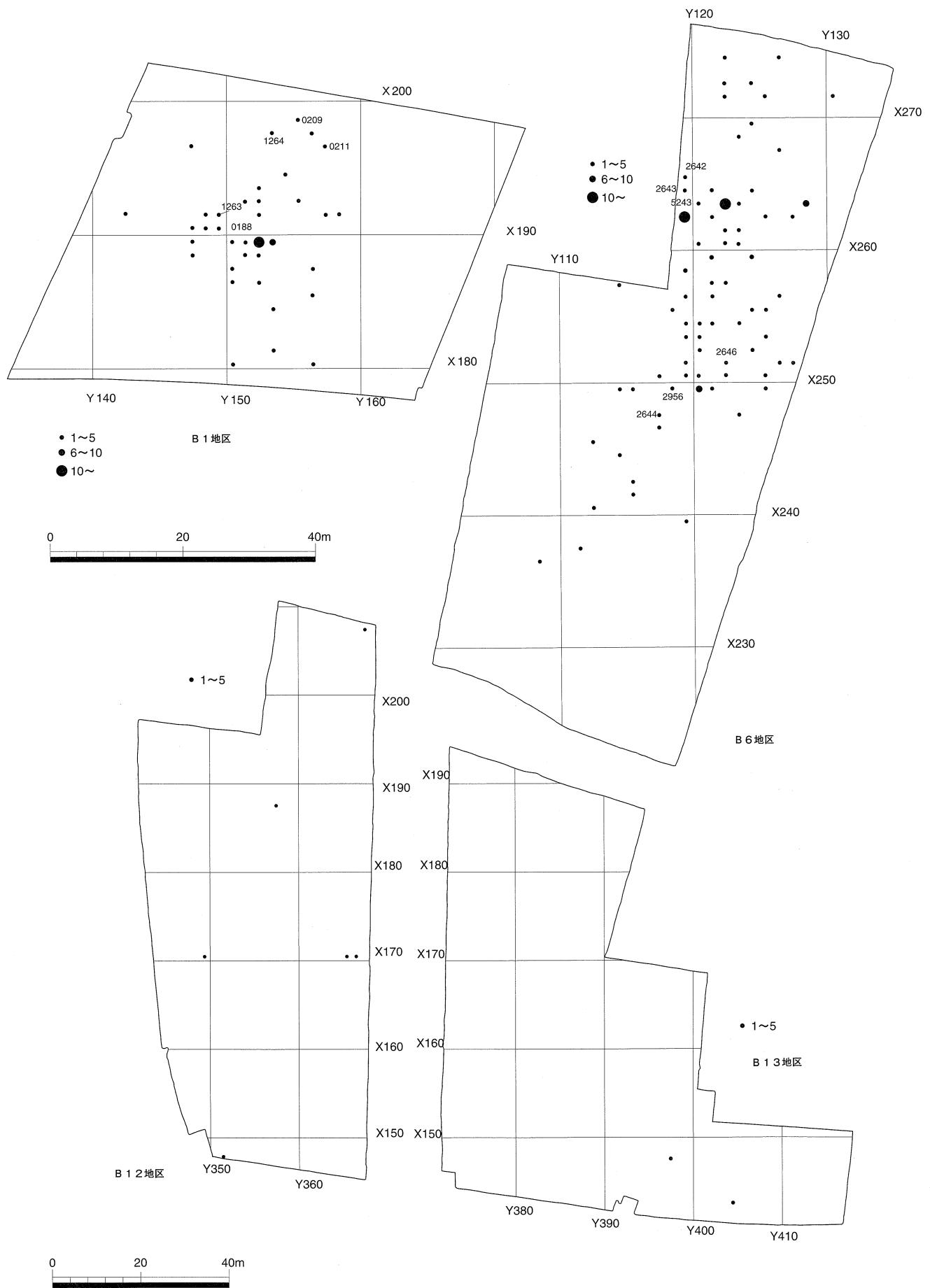
第1図 B地区出土製塩土器



第2図 地区別製塩土器出土比率

表1 B地区出土の製塩土器破片数集計表

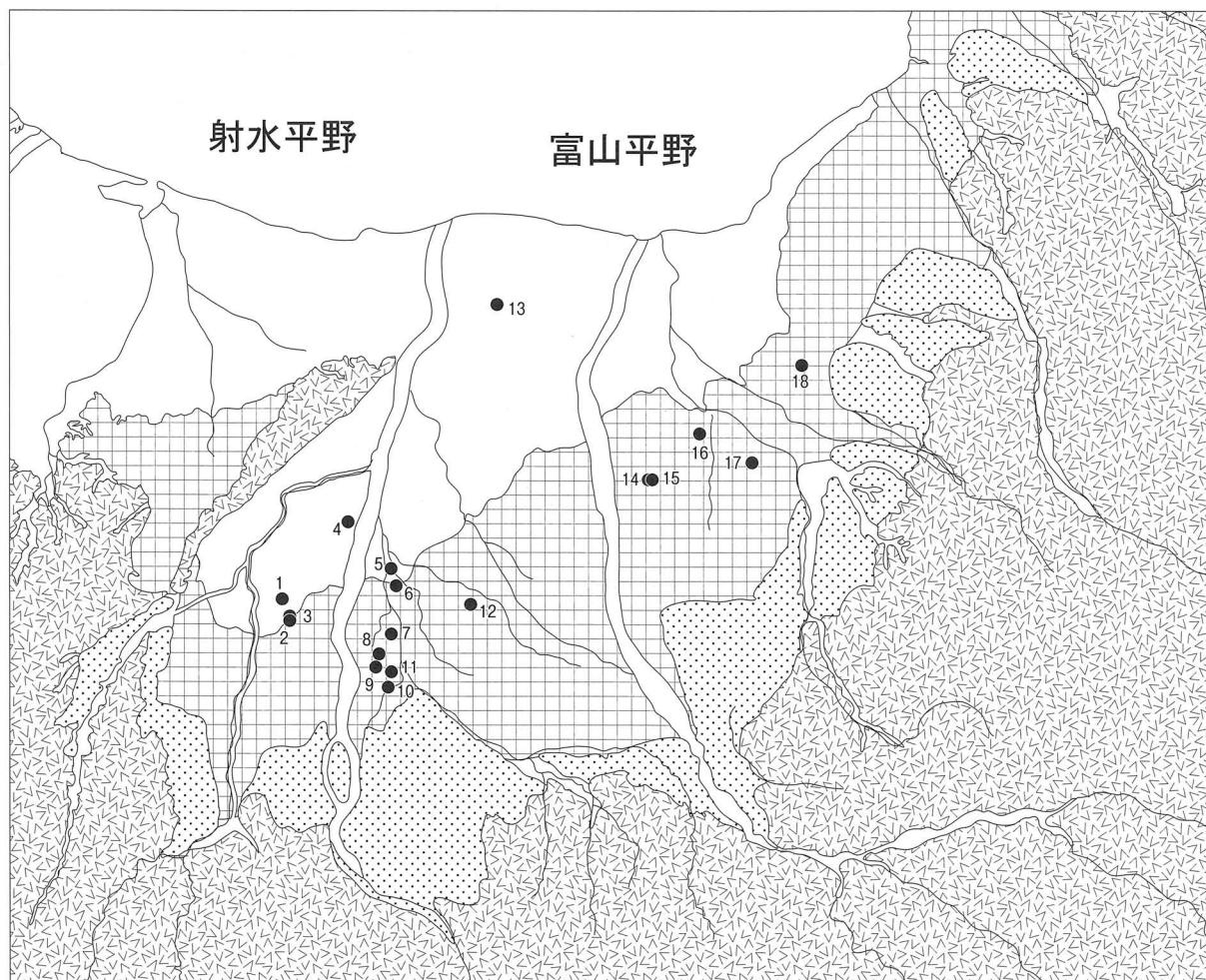
器種	B1地区			B2地区			B6地区			B12地区			B13地区			合計
	遺構	包含層	小計	遺構	包含層	小計	遺構	包含層	小計	遺構	包含層	小計	遺構	包含層	小計	
製塩土器	33	39	72	0	0	0	77	69	146	1	5	6	0	3	3	227



第3図 製塩土器の分布

表2 富山平野の製塩土器出土遺跡

番号	遺跡名	集落の性格	型式	時期	点数	備考
1	砂子田I遺跡		棒状尖底	7C後半～8C後半	1点	旧河道より出土。
2	中名I・V遺跡	内陸部の集落	棒状尖底	7C?	4点	
3	中名II遺跡		平底			
4	鶴坂I遺跡					試掘
5	黒瀬大家遺跡					試掘
6	黒崎種田遺跡					試掘
7	友杉遺跡	内陸部の集落		平安時代の製塩土器		試掘
8	任海宮田遺跡	内陸部の集落	短脚尖底等	9C～10C前半	12点	B地区内で出土破片数は227点
9	吉倉B遺跡		棒状尖底			
10	栗山楮原遺跡	内陸部の集落	尖底(能登式)	10C前半	2点	出土破片数は25点
11	任海砂田遺跡					
12	上新保遺跡					
13	米田大覚遺跡		棒状尖底			
14	利田横枕遺跡	内陸部の集落	尖底(能登式)	6C後半～7C前半	2点	
		内陸部の集落	尖底(能登式)	6C末～7C初	10点	素掘り井戸より多量に出土。
15	古海老江遺跡	内陸部の集落	尖底(能登式)	6C末～7C初	2点	利田横枕遺跡に隣接※小片の写真のみ掲載
16	浦田遺跡	内陸部の集落			1点	口縁部小片
17	辻坂の上遺跡	内陸部の集落	尖底(能登式)	6C後半	1点	二次的被熱を受けている。
18	東江上遺跡	「村落の長(里長クラス)の居住地」	尖底(能登式)	7C末～8C初	3点	掘立柱建物3棟、倉庫3棟が溝で区画される。円面鏡なども出土している。



第4図 富山平野の製塩土器出土遺跡